

白になりたい黒

北海道おといねっぷ美術工芸高等学校 三年 大澤 花鈴

私の住んでいる町の自慢をさせて下さい。この町では学校に遅れるかもしれないということがないので。なんたって雲通学なのだから。その辺に浮かんでいる純白な雲を手で引き寄せて、ふわりと乗る。進めと言えば稲妻のように街をすり抜け、目的地へたどり着く。それだけじゃないですよ。毎日の新聞配達は白ヤギが行っています。たまに食べちゃいますが。白い巻き貝を耳に当てると遠くの人と話す事ができますし、積もった雪をバケツですくえば砂糖になります。不思議で一風変わった世界で生きる日常に飽きることはありません。よければあなたも、この町へ来てみませんか――

そんな絵を、絵を描いていた。

空をピンクに塗りながら、こんな雲を掴むような話は実際には無いのだと、現実感に潰されながら一人アトリエで手を動かす。自分の思い描く世界も、夢のような日常も、全て科学だの、不変だのでかき消されてしまう。その反抗心で絵に描いた。周りからの反応はというと、「非現実的な色が素敵！」だとか「絵でしか描く事のできない世界って独創性があるいいね」だとか。もちろん好評なのは嬉しいけど、感想を聞いたたびに叶う事は無いという現実をつきつけられているようで、余計虚しくなる。

「雲の色はどうしようか。」

空がピンクなら雲は淡い黄色か水色か……。窓から風が吹いて、自分の少し焦げた肌を冷ました。白と青の絵の具を取ってパレットに出すと四対一で混ぜる。するとケースの中から黄が文句を言う。

「なんで青なんだー。」

他の色たちも喋り始めて、

「黄緑の方が映えていいんじゃないか？」

「ダメよ、春っぽい。私の紫がいいわ。」

「それにしたって白はいいよなあ。」

「たくさん使ってもらえるもんね。」

白は凄い。周りからは頼られ、嫌な事は塗り潰してくれるスペックの高さ。あ、そうだ。また白に頼ろう。厚く塗って真っ白にしてしまおう。もう描きたくないんだ、こんな絵は。憧れを絵に描いてどうなるというのだ。

昔から何かを想像したりアイデアを出すのが好きだった。でも周りからは「夢みがち」だなんて言われて、とても悔しかった。最初から決まっていた事や生まれた時から持っていたものが変えられないように、この世の中の常識も変えることが出来ないのだ。

大きな器を取りに行こうと椅子から立ち上がったその弾みに服が画材ケースにひっかかり、ガッシャーン、バラバラと大きな音をたてて色が弾けた。溜息をついて拾おうとしたら、ぐにやり。恐る恐る足元を見てみると、白い絵の具がチューブから飛び出し、自分の焦げた肌にまでついていて。最悪だ。よりによって白。こんな色のコントラストなんて見たくなかった。まるであの感想を聞いたときのようだ。白にはなれない黒。ほろりと雨が足に降り注いで、絵の具が滲んだ。力が入らなくなつて尻もちをついた。そうしたら、ぐにやり。

青が晴れた空のように広がっていた。

自分は衝動に駆られてその青を足ですくい、タイルの床に伸ばしてみた。近くにあった黄もチューブから出して、適当に伸ばす。赤も緑も紫も、あらゆる絵の具を出してクルクル踊った。まるでダンスフロアで羽目を外した踊り子のように。色が混ざり合い、濁って濁って濁って。

はあはあと息を切らせて床を見ると、花が咲いていた。今まで作ったことのない鬱蒼たる黒が主役となっていた。

「綺麗だ。」

そうか、そういうことか。そのものになれなくても活かし方次第で生まれ変われるのだ。そう考えたら心臓がバクバクと鳴って止まない。今までの不満と欠落感が一気に満たされて、自分は先程まで描いていた絵を見つめた。もしかしたら雲も掴め

るかもしれない。ヤギが新聞運ぶのだって出来ないことではないし。気持ちを満たされたら絵が描きたくなってきた。反抗心とかじゃなくて、好きだったんだ。この胸のドキドキが根拠だろう。

そうして自分は真っ白なキャンバスを張った。どんな色を使おうか。油彩にしようかアクリルにしようか。何にしても題材は、やっぱり、

「不思議で一風変わった世界にしよう。」